

難波渦

2007.11
No.7

題字 浅野鈴秀氏（日本書芸院一科審査員）

国際シンポジウム

「人々の暮らしと文化遺産—中国・韓国・日本の対話—」

2007年7月14日（土）

会場：関西大学尚文館A V大ホール

2007年7月14日（土）、関西大学尚文館A V大ホールにて国際シンポジウム「人々の暮らしと文化遺産—中国・韓国・日本の対話—」が開催された。今回のシンポジウムでは、中国・韓国・日本からパネリストを招き、人びとの生活の中にどのように文化遺産が存在するかをそれぞれの立場から報告していただいた。続いて、センター長がコーディネーターを務めパネルディスカッションが行われた。当日は台風4号が接近しており、大雨にもかかわらず168名の参加があった。

楊 志剛氏（復旦大学文物与博物館学系教授）

「人々と文化遺産—上海を中心とした調査より—」

吳 恩培氏（中国蘇州市職業大学吳文化研究所所長）

「蘇州文化と世界文化遺産に登録された蘇州園林」

陳 来生氏（中国蘇州科技学院教授）

「伝統文化の保護と観光開発—江南水郷古鎮を例に—」

金 鎬詳氏（（財）新羅文化遺産調査団専任研究員）

「文化遺産の現状と課題」

金 美貞氏（韓国文化遺産観光コーディネーター）

「観光からみた韓国の文化遺産」

奈良 俊哉氏（近江八幡市文化政策部文化振興課専門員）

「日本における事例」

重要文化的景観選定第1号「近江八幡の水郷」

河田悌一学長のあいさつに続き、中国から楊志剛氏が人びとと文化遺産に関する問題について、上海での事例を報告した。中国最初の博物館は、1868年、フランスのイエズス会宣教師ピエール・ウッドによって上海南西部の徐家匯に建てられた。その後、上海では1945年までは5、6箇所しか建設されなかったが、1950年代および80～90年代には急速な発展を遂げた。近年「コミュニティー博物館」という概念が広まり、博物館サービスに対して、その方法論を指導するという役割を担いつつある。これは社会全体の発展により、人びとの博物館や



楊 志剛氏

文化遺産への関心が深まり、より高度な精神的な要求が提示されてきたことにある。上海は中国でも比較的早い時期から人びとと文化遺産の関係に関心を抱いてきた地域であるが、今日まで、成功した面だけでなく不十分な面もある。もし、中国の文化遺産事業の発展に対して文明観による観察ができれば、人びとと文化遺産の関係は文明の程度を判断する大切なものさしとなる。

続いて、吳恩培氏が世界文化遺産に登録された蘇州古典園林について報告した。歴史が我われに古典園林と数多くの古跡を残してくれたが、1950年代、経済発展が急務とされた時代、工場建設に伴い多くの園林が破壊され、文化大革命では蘇州の伝統文化やその遺産が大きなダメージを受けた。しかし、1994年、蘇州古典園林の世界文化遺産への申請に向け着手し始めた。登録に至るまで6年かかったが、結果9つの蘇州古典園林が世界文化遺産の聖壇に上がった。登録後、いかに景観保護していくかが蘇州市と市民の直面する大きな課題となっ



吳 恩培氏



陳 来生氏

た。その課題解決のためには、①完璧な関連法規を定める、②関連法規に従い、世界文化遺産に登録された園林の保護管理をより強化する、③世界文化遺産に登録された園林を中心に各地の歴史園の修復・保護を展開する、④建設の際に周りの環境を整備する、⑤市民たちにその意識を浸透させる、ということが重要である。

陳来生氏は江南水郷古鎮を例に中国における伝統文化、つまり文化遺産の保護と開発について報告した。国内でも代表的な古鎮である江南水郷古鎮は、その悠久の文化と歴史、独特な水郷風景においてずば抜けている。伝統文化遺産の研究と保護の観点から、水郷古鎮研究は点を面に押し広める利点がある。このような古鎮の保護と経済の発展を両立する方法の一つとして観光業を利用することがあげられる。中国観光産業でみられるように文化遺産資源の市場開発は経済発展という状況のもとでの代償を最小限にする現実的な選択である。しかし、一部の地域では歴史文化価値への認識が不足しているため、多くが破壊され、利益追求のため、保護と開発が本末転倒して深刻なダメージを与えた。古鎮の開発は社会、経済、環境の3方面から考えなければならない。

中国からのパネリストに続き、韓国から金鎬詳氏が慶州における文化遺産の現状と課題について報告した。日本同様、大規模な開発により多様な遺跡が発見され、保存された。また古都保全法が立案され、慶州都心部では、民家移転により大規模古墳群が原型を取り戻した。しかし、近年、慶州地域での原発にかかわる放射性廃棄物処理場の建設により、文化財に対する被害や歴史都市としてのイメージの崩壊などが危惧される。さらに、韓国では10数年前から地方自治体が設置され、市長や団体長

が市民や地域住民により選出される。そのため、文化財保護法で規制されている地域に対する解除や開発圧力への働きかけが困難になり、遺跡が破壊され、文化的景観なども保存が難しい。また、産業技術の発達により、農漁村の生産遺跡も急速な変貌をみせている。つまり、近代文化遺産としての麻窯や木炭窯などの生産遺跡が産業化社会の流れで急速に消えつつある。私たちの暮らしの大切さを喚起させてくれる文化遺産の真の価値を広く知らせ、その保存に励んでいきたい。

つづいて、金美貞氏は釜山や慶州で観光コーディネーターとして日々働いているその現場での体験から、韓国における文化遺産の現状を報告した。特に、日本人観光客を戦争や侵略などに関わるところに案内し説明するとき、日本人の反応として、怒る人、謝る人、無関心な人とさまざまである。そのため対応に困ることが多く、そういうところをどのように触れたらよいかいつも悩み、実際には触れないことも多い。自分が受けてきた教育は自国の素晴らしさを教えられ、他より優れたという感覚だったが、それは違うのではないかなと思うようになってきた。特に今後は個人個人のふれあいが増える時代なので、もっとクールな意識をもってお互いにありのまま受け入れられるとき、日韓の本当のフレンドシップがもてるのではないのでしょうか。

最後に日本から奈良俊哉氏が、重要文化的景観の第1号として選定された近江八幡の水郷について報告した。近江八幡市には八幡山城の八幡堀があり、今の近江八幡市のまちづくりの基礎になっており、その時の住民パワーが今も生きている。そのおかげで重要文化的景観の第1号に選定された。国交省が中心となって定めた景観法において、景観計画を立て、その中で文化的景観として位置付けし、それができたら、歴史や世業を語る上で重要な所を重要文化的景観として文化庁が認める。そこで近江八幡市では6つの風景ゾーンに分けて景観計画を立て、ひとつずつ景観法を決定することにした。水郷地帯については首尾よく景観計画を立てることができた。水郷は水路、ヨシ地、里山、集落、水田という5つの要素があり、これらがどのように残り、使われ、現在どのようなになっているのかを証明すれば重要文化的景



金 鎬詳氏



金 美貞氏



奈良 俊哉氏

観としてよい。戦後、琵琶湖周辺が干拓され、圃場整備により綺麗な田圃に変わったが、川や島、堀などそのまま残っている部分もある。変化したなかにも遺されたものがあるということの証明をした。ヨシ産業・農業・瓦産業が環境循環型のクラスターが出来上がっており、これも重要文化的景観のひとつの要素である。

パネルディスカッション

高橋隆博センター長がコーディネーターを務め、パネルディスカッションを行った。まず、水的环境保全について、各地域でどのような問題があり、どのような取り組みを行なっているかが議論された。中国・蘇州では、水質汚染は一つの深刻な問題であり、例えばフランスのテレビ局から川の撮影依頼を受けたが、断らなければならないほど川が汚染されている。今後解決しなければならない大きな問題である。そこで、市役所がプロジェクトを立ち上げ、川の汚染問題に取り組んでいる。韓国・慶州では、今のところ汚染などの問題はないが、河川の北側に古代都市が形成されていたということが発見されたことも含め、今後古代の地形を確認し、計画していかなければならない。近江八幡市では、河川の下流域に属しているため上流からのゴミが集まる。そこで、川にオイルフェンスを張ることを試みている。このことによって地域住民の水辺空間に対する意識が戻ってきており、重要文化的景観に選定された際にも、地域住民の意識の高さが評価された。

続いて、文化遺産と観光という問題について、韓国・慶州では観光客が出すゴミの問題、また慶州の子供達までもゴミを捨てるようになった。寺院では、観光客の増加で本来の寺院の機能が損なわれ、ただの観光名所化し



パネルディスカッションの様子

てしまうということが大きな問題となっている。中国・上海では、商業化、過度な発展が目立つようになり、先述の蘇州のような水質汚染にもつながる。文化遺産を保護することが最大の目的であり、いかに利用するかが問題である。文化遺産の保護、開放にはいろいろな問題により制限がある。蘇州では、小学校の建設の際、高く建てる予定だったものを景観保護の観点から再検討されることになった。一般市民は文化遺産を自分達の手で保護しなければならないということを意識している。近江八幡市では、重要文化的景観に認定されて観光客が増加したことによって、住民は自分達が住んでいる場所の良さを再確認した。しかし、マナーの悪い観光客によって私生活をのぞかれるということが住民にとって脅威となった。観光政策のための開発を市や市民は望んでいるのではなく、そのような開発を行なっているわけではない。このような問題を含め持続的な観光を目指している。

そして、文化遺産を核としたまちづくりについて、各国の行政が市民や子供達にどのような教育を行なっているのか、市民がどのような教育を起こそうとしているのかなど、その取り組みについて議論された。韓国・慶州では、韓国の人にとって慶州は小学生の時誰でも一度は訪れるところであるため、特別な教育をしているわけではないが、訪れた人に文化遺産を解説するための団体を設けている。近江八幡市では、小学校でゆとりの時間に関係教育を積極的に取り組んでもらっている。小学生に、「景観を今後どうしたらよいか」と問いかけたところ、僕達の遊び場を奪ったのはあなた達だから、遊び場を返してほしいという答えが返ってきた。このような子どもたちをもっと育てていきたいと思う。中国・蘇州では、小学校の教科書には庭園について載っている。また小学生を対象とした課外活動として、無形文化遺産である宮廷舞踊の昆曲の舞台上がってもらったりしている。上海の復旦大学では、専門学生は文化遺産に対する意識は高く、ある学生は母校の中学校が再建される際、それが歴史的建造物であるとわかっていたので、再建することを阻止した。また、一般の学生たちも文化遺産や歴史に対する興味が高まっているようで、文化財関係の講義が増えてきている。

ここでパネルディスカッションは終了となったが、議論は尽きることがない。それほど文化遺産がかかえている問題は複雑なのであろう。国際シンポジウムは終了したが、これからが始まりなのである。文化遺産を通して各国間の交流が深まれば幸いである。最後になりましたが、翻訳・通訳でお世話になりました陳波氏、石曉軍氏、林雅清氏、成美娜氏、シンポジウムにご協力くださった皆さまには厚くお礼申し上げます。

(生活文化遺産研究プロジェクト R.A. 千葉太朗)

第5回NOCHSレクチャーシリーズ 「大阪のモノづくりのおもしろさ」

2007年6月30日(土)

会場：関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

航空機の部品や斬新なデザインのバッグなど「メイドイン大阪」の製品が世界に羽ばたいている。これらは、中小企業や地域に眠っていた技術を見つめなおすことで生れた、モノづくりの成果である。

第5回 NOCHS レクチャーシリーズでは、地域や企業に眠っている技術・ノウハウである「地財」に注目し、産業や地域活性化の課題を解く鍵となると呼びかける大西正曹氏^{まさとも}を講師に迎えた。さらに「地財」を生かしたモノづくりに取り組んでいるパネリストから、モノづくりの現場に即したコメントを得た。

「地財」の探求は、当センターが目指す、大阪の地に眠る「文化遺産」を再発見しようという構想にも共通するものであり、モノづくりの視点から、大阪の多様な「地財」を見つめる機会となった。

基調講演

大西正曹氏（関西大学社会学部教授）



大西氏が提言する「地財」とは、特定の地域や産業、企業の中に眠っている隠れた財産であり、この「地財」が産業復活や地域活性化の鍵となる。

大西氏が「地財」の価値に気付いたのは、ある繊維会社の再建について話を聞いたことがきっかけである。繊維メーカーのセーレン株式会社は、社長に抜擢された川田達男氏が、すべての従業員と面談し、従業員が持つアイデアや能力を引き出して会社再建にあたった。大西氏はこの点から、企業には人材という宝があることに気付く。学歴のような目に見える指標ではなく、従業員各個人の内にある技術やアイデア、可能性を掘り起こすこと

が重要であり、それがまさしく「地財」であると説明した。大学教育でも、同じことが言えるという。大学は学生個人に眠る財産を発掘する場であり、教師は学生の心、「地財」を発掘するべきであると語った。

モノづくりの課題と重要点については、次のように説明した。日本は縦型社会であり、大企業からの注文を受ける側に立つ中小企業は、反対に受注できない。また、大阪においても、モノづくりの知恵はあるが、横の連携を取ることが苦手であるという。縦型を水平化することで、日本のモノづくりの可能性が開けるとした。

中小企業については、いかにして活性化するかが課題である。活性化の例については、新潟県の三条市・燕市の金属産業を例にあげた。三条市・燕市では、金属研磨にポイントを見出し、磨き屋シンジケートを創設することで注文数を増やした。「モノ」に執着するのではなく、金属研磨という「コト」に注目したことが、成功の要点であるという。

大西氏によれば、大阪はこのような「モノ」から「コト」へ、モノからシステムに移行することが苦手であり、それが大阪におけるモノづくりの欠点であるという。

最後に、大阪で中小企業間の連携を図り、「モノ」から「コト」へとシステムを構築し、欠点を克服した例として水戸氏・佐藤氏の両パネリストを紹介した。

講師・パネリストによる鼎談

大西正曹氏

水戸祥登氏^{よしのり}（三陽鉄工株式会社代表取締役）

佐藤元相氏^{もとし}（大阪商工会議所東成・生野支部

異業種交流会フォーラム・アイ元代表幹事）

パネリストの水戸氏、佐藤氏を交え、鼎談を行った。まず、水戸氏、佐藤氏が各事業を紹介し、続いて大西氏の司会で両氏が成功した理由、大阪ならではのモノづくりのおもしろさについて、以下のように語り合った。

水戸氏・佐藤氏による事業紹介――

水戸氏：「製造力は創造力」をテーマに、ボーイング787の部品やソフトクリームサーバーの部品を製造している。またOWO(次世代型航空機部品供給ネットワーク)というコミュニティーを作って活動している。

かつては大手企業の下請けをしていたが、バブル崩壊により受注を断られた。多くの会社を回って仕事を探したところ、それまでの技術が評価されて仕事をもらえた。技術さえあれば生き残っていける。実は自社が培ったのはモノづくりの技術であったことを痛感した。

佐藤氏：1997年に商工会議所の東成大阪支部（当時は生野支部）の支援を受け、共同事業のネットワーク化と地域活性化を目的にした異業種グループ「フォーラム・

アイ」を立ち上げた。バブル崩壊によって参加企業は減少したが、再生の道を模索する。

視察に行ったイタリアのミラノは、従業員 10 人以下の企業が多く、生野と似ていた。ミラノの商品品質は日本には及ばないが、現地の伝統技法を使い、消費者のニーズに応えたモノづくりによる、高付加価値のある世界ブランドがある。そこから①客層を明らかにする、②機能ではなくデザイン重視、③ネットワーク重視、④情報発信力が必要、いうことを得て、自分たちで「YOROI」というブランドを作った。大阪のモノづくりを PR して、世界に本気でモノを売りに行こうと狙っている。



「YOROI」ブランドの解説をする佐藤氏

プロジェクトが成功した理由——

佐藤氏：フォーラム・アイのメンバーがモノづくりに対する目標と自信をなくした段階で、ミラノのようなモデルを見つけて、そこへ向かっていこうと進めたことが成功した理由。また、ミラノでは高付加価値なモノづくりを成功させるのに 50 年かかっているため、我々も同じくらいかかるだろうが、その後の礎となる 5 年という期限を設定して進めたことも要因だったと思う。

水戸氏：航空機は環境を汚さないことが次世代のテーマになっている。我々のネットワークはその技術を持っていることをボーイング社に直接アプローチし、評価された。つまり、次の世代をクリアする難題に打ち勝てば中小企業は残れる。

もうひとつのソフトクリーム製造機械については、最大 5 種類しか作れない既存機械に比べ、100 人が 100 種類バラバラに頼んでも対応できる、時代に要求される機械を作ったことが成功理由だった。

大阪ならではのモノづくりのおもしろさについて——

佐藤氏：大阪のネットワークを活かしながら、モノづくりで日本文化を海外にアピールしたいと考えている。折りたたみ箸で日本文化を伝え、音楽プレイヤーやタブ

レットのケースのような世界標準で遊び心のあるモノで打って出ようとしている。

水戸氏：中小メーカーがたくさん集って何かをするパターン、同時に新しい技術を誘導して更に進んだ技術に創り上げるパターン、そしてデザインを中心としたモノづくりへの挑戦という三つのテーマが大阪にはある。何か一つ目標となるキーワードを中小企業が持てば、必ず新しい道が開けていくという土壌が大阪にあると思う。



自社のパンフレットを片手にコメントする水戸氏

アンケートより

- ・門外漢にも興味津々たる内容を巧みな話術でお聞かせいただき、大阪在住の老生に新たな自信をお与え下さいましたこと篤くお礼申し上げます。
- ・中小企業の内面がつぶさに分かり、非常に驚いている。ご苦勞痛切に感じた。
- ・大阪の中小企業の持つ「確かな力」に驚きました。お二人の話を総合すると、明るい未来がすぐ広がっているように思えました。
- ・大阪の町工場の再生と活性化、大変興味深かったです。ミラノという街自体がブランドになるように、大阪自体にも新たな価値が生まれると良いですね。
- ・パネリストお二人の話を私なりに理解できたとしたら、“明確な目標を持ってモノづくりをする”ではないでしょうか。大阪で育った中小企業の経営者の力強い言葉に感動しました。

当日の参加者は 78 名にのぼり、多数の方にアンケートにご協力いただきました。

なお、今回の詳細は年度末刊行予定の Occasional Paper No. 7 に掲載いたします。

（祭礼遺産研究プロジェクト R.A. 内海 寧子）
（生活文化遺産研究プロジェクト R.A. 影山 陽子）

第3回ワークショップ

「なにわ・大阪を歩く 天王寺七坂を完全踏破 ～四天王寺から生國魂神社～」

2007年5月26日(土)

前日のどしゃ降りの雨が嘘のような快晴のもと、天王寺公園天王寺ゲート前広場には、第3回ワークショップの参加者総勢25名が集合した。参加者は、研究員の大谷先生のほか、学部生・大学院生、5月20日の教育後援会でチラシをご覧になったご父母も駆けつけてくださった。

今回のワークショップは、学内を飛び出し、今に生きる大阪の文化遺産を、参加者の目と耳と足で実感してもらおうとの試みで、四天王寺から生國魂神社までの直線距離にして約2kmを歩くというものである。最大の目的は、上町台地の名残をとどめる「天王寺七坂」の完全踏破。距離は短いものの、高低差のある少しハードなコースである。

四天王寺 一本坊庭園八角亭の特別公開—

参加者の点呼ののち、四天王寺参道のみどころを宮元研究員が紹介し、センターの幟を目印に、いざ出発。赤松種苗には「なにわの伝統野菜」が、四天王寺書林には大阪関係の本がズラッと並ぶ。ゆっくりと見てもらうことができなかったが、時間の許す限り、それぞれの関心にしがって物色。大学院生が多かったため、四天王寺書林で目の色を変えた参加者も多かった。古くから四天王寺みやげとして知られる「釣鐘まんじゅう」で有名な釣鐘屋本舗に立ち寄る。名物に出会うことは町歩きの楽しみである。

浄土信仰の中心地であった四天王寺石鳥居を抜け、毎年4月の聖霊会舞楽の舞台となる石舞台を見学し、本坊へ。昨年センターで行われた天王寺舞楽の公演は記憶



四天王寺本坊庭園八角亭の特別公開

に新しい。ここで高橋センター長と合流し、内田研究員からの四天王寺の解説にしばし耳を傾け、本坊庭園を拝見することとなった。「極楽浄土の庭」の名の通り、大阪市内のど真ん中であることを忘れさせる佇まいである。四天王寺様のご好意により、庭園内にある「八角亭」の内部を特別に公開していただいた。八角亭は、明治36年(1903)に大阪で開催された内国勸業博覧会の際に建てられたものを現在地に移築したもので、国の登録文化財に指定されている。色鮮やかなガラス窓をもつ洋風建築でありながら、日本庭園になんの違和感もない。交替で内部を見学した後、「天王寺七坂」へとむかった。

天王寺七坂かいわい

国道25号線沿いにある「逢坂」の碑の前で、内海研究員が「大坂夏の陣図屏風」のパネルを片手に、大坂夏の陣で激戦地となった周辺を解説。真田幸村最期の地とされる安居神社へ。境内を出ると天神坂。西側から天神坂の急坂を見て、清水寺へ。かつて、この辺りは「天王寺七名水」と呼ばれるほど、湧き水が豊富なところであったが、開発とともにその多くは枯れ、今では唯一、清水寺境内の「玉出の滝」が残るのみである。現在でも行者の修業の場とされており、現代に生きる文化遺産である。大阪市内に滝があることに参加者一同、驚きの眼差し。ふたたび七坂めぐりに戻り、清水坂から愛染坂。そろそろ足も重くなるが、ワークショップのポスター・チラシ・「探訪のてびき」の表紙を飾った大江神社の狛虎の愛らしさに癒される。大阪星光学院内の浮瀬俳跡蕉蕪園で、松本研究員のここが松尾芭蕉や与謝蕪村が俳句を読んだ「浮瀬亭」の跡地であるとの解説に往時をしのぶ。大阪星光学院の生徒さんの礼儀正しさに感心し、勝鬘院へ。美しい多宝塔を見学し、縁結びの愛染さんにしっかりと手を合わせた参加者も多かったであろう。愛染坂を下り、しばらく松屋町筋沿いを北上する。右手には寺院の藁が連なる。豊臣秀吉が大坂築城に際して、城下の寺院を一



勝鬘院にて説明に聞きいる参加者

箇所を集めた寺町である。蛇の姿に似ていることから名付けられたといわれる口縄坂を上る頃には、参加者の顔には疲労の色が濃くなっていた。「あと少し頑張りましょう！」と鼓舞しつつ、谷町筋を北上。途中、内海研究員による寺町の解説があり、生國魂神社の杜が間近に見えながらも、源聖寺坂を下るために左折。源聖寺坂は、階段状になっており、それがまた足に打撃を与えるが、坂のおもむきは疲労感を忘れさせ、デジカメの大活躍。またまた生玉公園のダラダラ坂を上り、生國魂神社に到着した。あとは真言坂を残すのみである。

生國魂神社 — 『大阪人』北辻稔氏のゲストスピーカー—

しばらく休息をとり、参加者は境内の参集殿に。冷房の効いた館内に生き返る心地である。出張先の平野から駆けつけてくださった『大阪人』編集長の北辻稔氏と合流した。北辻さんからは、「大阪人も知らない大阪」発見 magazine として文化人を中心に根強い人気を誇る雑誌『大阪人』の編集のご苦労や取材時の楽しさなどを披露していただいた。『大阪人』は 5000 部発行であるが、それはわかっている人に集中的に売りたいからとのこと。『大阪人』に対する北辻さんのプライドを感じさせられた。また、町歩きには「ねらい」が必要であることを教わった。ねらい通りになるのは稀であり、ねらいとのズレに新しい発見があり、そこにおもしろさがあるのだ。町歩きでは、町の人に話を聞くことも重要で、店の人が一番よいそうだ。それは、出店に際して、その町のことを調べるからで、そこに町に対する哲学や思想が生まれるというわけだ。さらに、最近、近代建築がレストランやカフェに変貌しているのは、人びとが古いものにくつろぎを求めるようになっている証しであると述べられた。

北辻さんのお話は、フィールドワークの心得をご自身の体験から語られたものであり、貴重な時間となった。センターでも『大阪人』を購読しているが、これからは、



生國魂神社にて北辻稔氏のお話を聞く

文章の奥にあるさまざまな思いを読み取っていききたい。

天王寺七坂を完全踏破！

北辻さんのゲストスピークの後、内田研究員の解説を聞き、天王寺七坂の最後、真言坂前で解散となった。真言坂を下って、右へ行けば谷町九丁目駅、左へ行けば日本橋駅ということで、参加者は真言坂をくだり、それぞれ帰路についた。これで、今回のワークショップの目標であった天王寺七坂を完全踏破。初夏を思わす暑さとなったものの、参加者みなさんのご協力により、全員無事に全コースを終了することができた。

参加者からの写真投稿

今回のワークショップでは、事前にセンターで勉強会をもち、コースの説明をした。また、当日歩く中でみつけたおすすめの「なにわ・大阪の風景」の写真を募集した。ワークショップ後、参加者から多くの応募があったが、そのうち 2 点を紹介したい。政策創造学部 1 回生の S さんと K さんの作品である。



四天王寺冠木門の獅子



清水寺の玉出の滝

今回のワークショップ開催にあたっては、センター研究協力者の南谷恵敬先生に多大なご尽力をいただいたほか、生國魂神社禰宜の山本真人様、畦田みち子様には大変お世話になりました。また、浮瀬俳跡蕉蕪園見学では、大阪星光学院様にご協力いただきました。この場を借りて、心から厚く御礼を申し上げます。

なお、大阪星光学院内の浮瀬俳跡蕉蕪園を見学される際には、必ず事前に大阪星光学院までお問い合わせください。

(P.D. 櫻木 潤
祭礼遺産研究プロジェクト R.A. 内田 吉哉)



2007 年度第 1 回祭礼遺産研究例会

黒田 一充（関西大学文学部教授／なにわ・大阪
文化遺産学研究センター研究員）

「津田秀夫文庫本『神社を中心とする村落生活調査報告』について」

2007 年 5 月 24 日（木）



祭礼遺産研究プロジェクトでは、2007 年 3 月、昭和前期の貴重な神社資料である『神社を中心とする村落生活調査報告（一）大阪府・大阪市・豊能郡・三島郡一』を、なにわ・大阪文化遺産学叢書 3 として刊行した。『神社を中心とする村落生活調査報告』は、神社に対し、神職・氏子・祭礼・宮座について質問したアンケートの質問・回答集である。今回の例会では、叢書所収の原資料である大阪市史編纂所蔵・津田秀夫文庫本『神社を中心とする村落生活調査報告』の調査を進めている黒田一充氏が、これまでの調査を踏まえ報告を行なった。

黒田氏によると、①民俗学者であった肥後和男が昭和 10 年代に、近畿を中心に神社と村落結合の研究のため調査を実施しており、本資料もその調査の一部である。②大阪府内の神社に対するアンケートの質問票は、肥後所有分と大阪府の公文書として 2 部以上作成されていたと考えられ、津田本には大阪府の受付印があることから、大阪府所有の資料が津田氏の所蔵となった可能性がある。③大阪府の質問票は、他府県とその書式が違うことから、大阪府が独自に印刷したものである、と資料の背景を明らかにした。さらに、この質問票には氏子区域を問う質問が付け加えられており、大阪府が各神社の氏子区域を把握するために質問項目を追加したとの指摘がなされた。

例会後半では、参加者から、肥後和男の宮座研究の背景、調査が民俗学研究に与えた影響はどのようなものであったかとの質問や、大阪府による氏子区域の把握は、神社合祀と関係があるのではないかと助言を得た。

なお、祭礼遺産研究プロジェクトでは、残る河内・和泉地域の資料についても刊行する準備を進めている。

（祭礼遺産研究プロジェクト R.A. 内海 寧子）

2007 年度第 1 回歴史資料遺産・学芸遺産研究例会

—大阪の碑文・拓本と学芸—

2007 年 6 月 28 日（木）

今回の研究例会は、歴史資料遺産研究プロジェクトと学芸遺産研究プロジェクトの合同で開催した。当日は、研究報告とともに、菅楯彦画・藤沢南岳賛「猿田彦」（軸装）、本山コレクション拓本のうち坂本鉉之助墓碑を含む 3 点を展示した。

松永 友和（歴史資料遺産研究プロジェクト R.A.）

「大坂鉄砲方坂本鉉之助とその墓碑」

松永報告は、木崎愛吉（1865 ～ 1945）が抱いた坂本鉉之助＝「大塩の乱の勇士」像が、いかに形成されたかを明らかにしようとする報告であった。まず、坂本鉉之助（1791 ～ 1860）の墓碑銘の内容に着目し、大塩の乱が坂本にとって人生最大の画期になったこと、墓碑は大坂町奉行久須美祐雋（1796 ～ 1863）が懷徳堂教授並河寒泉（1797 ～ 1879）に銘文の作成を命じて建立させたことを指摘した。

ところで、坂本鉉之助の墓碑は近年新調され、建立当時の墓碑は現存していない。よって拓本が墓碑の状態を原寸大のまま伝える唯一の「歴史資料」ということになる。その拓本が本山コレクションに残されている。報告では、拓本のもつ「歴史資料」としての貴重性を指摘するとともに、墓碑銘の解読によって、『大阪人物辞典』坂本項目の記述に誤りがあることを示した。

報告の後半では、坂本の墓碑建立の背景を探るべく、大塩の乱後の坂本鉉之助に関する話に移った。坂本は大塩の乱鎮圧によって、幕府から褒賞・身分取立を受け、弘化 2 年からは名前が武鑑に掲載される。坂本の名声は全国に広まり、人びとの記憶に刻まれることになる。身分取立によって、大坂定番与力（陪臣）から大坂鉄砲方（直参）に昇進した坂本は、大坂代官竹垣直道や懷徳堂教授並河寒泉、大坂町奉行久須美祐雋らと肩を並べ、日常的な学芸交流をもつようになる。このような交流が、墓碑建立の背景になった。

坂本鉉之助が死去してから半世紀後、木崎愛吉は坂本の墓碑の拓本をとる。木崎が抱いた坂本鉉之助＝「大塩の乱の勇士」像の形成は、人びとの記憶と記録のなかに生きる「坂本鉉之助」という歴史意識のあらわれであると結論づけた。

質疑・応答では、参加者から拓本の基本的知識に関わる助言や墓碑と行状との関連、歴史意識に関する質問などを受けた。新たな課題・問題点が鮮明となり、今後さらに追究していきたいと思う。

（歴史資料遺産研究プロジェクト R.A. 松永 友和）

西田 孝司氏（松原市文化財保護審議会委員）
「大阪南部に残る泊園書院藤沢南岳・黄鵠の揮毫と碑文
—中河内郡恵我村別所の中山家資料を中心に—」



近代大阪の漢学を考える際、懷徳堂とともに無視できないのが、泊園書院の存在である。西田報告は、南河内内で庄屋を務めた家に残る藤沢家や泊園書院にかかわる資料、および各地に点在する藤沢南岳・黄鵠による碑文を素材に、泊園書院を通じて漢学がどのように広まっていたのかについて述べたものであった。

報告で取り上げられた中山家は、江戸時代に丹北郡別所村の庄屋や八上郡の大庄屋をつとめた家であるとともに、幕末から明治・大正期の大阪の漢学を豊かに享受した家であった。明治期、当主・中山潔は泊園書院の藤沢南岳に師事し、藤沢家と姻戚関係を結んだ。このことにより、中山家には藤沢家との交流を語る日記・写真・書画などの資料が豊富に残されることとなった。

さらに松原市内に藤沢南岳・黄鵠の手になる碑文が数多く残されており、泊園書院が地域の人びととどのように関係を築いていったのかについて、その一端が明らかになった。

藤沢南岳の足跡は、他の地域でも残されている。例えば当センターが調査を進めている植田家がある八尾市内にも、藤沢南岳の碑文が散見できる。また藤井寺市の道明寺天満宮では、泊園書院が復興させた積奠祭が、現在でもおこなわれている。

このことについて西田氏は、藤沢南岳による碑文の執筆や積奠祭の復興は地域のためにおこなった活動であり、門弟や地域の人びととの絆を強めることとなった、その結果南河内一帯に藤沢南岳の扁額や蔵書、碑文などの「遺産」が現在まで豊かに残ったのではないか、という興味深い考察を披露した。

本報告は、明治・大正期大阪の漢学において、泊園書院が重要な位置を占めていたことを改めて認識させることとなった。そして泊園書院が残した「文化遺産」をどのように守り、活用していくのかについて考える機会が得られた。

（学芸遺産研究プロジェクト R.A. 松本 望）

2007 年度第 1 回生活文化遺産研究例会

森本幾子（なにわ・大阪文化遺産学研究センター P.D.）
「近世大坂の婚礼—『鷺池家文書』の研究方法」

2007 年 7 月 30 日（月）



今年度第 1 回目となる例会は、冒頭で酒井亮介氏（生活文化遺産研究プロジェクト研究員・大阪中央卸売市場本場資料協会資料室室長）によって、鷺池家文書が大阪中央卸売市場本場資料協会資料室に寄贈された経緯について語られ、森本報告へと続いた。

森本氏は大阪中央卸売市場本場資料協会資料室所蔵の『鷺池家文書』を用い、近世大坂の商家である鷺池家において、婚礼がどのように執り行われていたかについての報告を行なった。まず『鷺池家文書』研究の意義として、①近世大坂商家における生活文化全般の分析が可能、②近世商品流通史において研究が少ない「消費（需要）」の分析が可能、③大坂商家としての信用構築の考察が可能、の 3 点を挙げた。

今回はこの 3 点をトータルで見ることができる行事として、鷺池家における婚礼と出産を取り上げた。その際の贈答品や嫁入り道具などの記録を見ると、祝儀銀には実用品が添えられて贈られており、上方では現銀のみの祝儀を嫌う傾向があることが読み取れる。また、隠居よりも義母に渡すもののほうが高額であること、下女や出入方の女性たち、取り上げ婆などへも気配りがなされていることから、嫁いだ後に、これらの女性との付き合いを円滑に行なえるよう配慮されているなどといった特徴が述べられた。この点について森本氏は、商家としての「家」を守り、存続させるためには女性の力が大きく影響したためかもしれないと述べた。

会の終わりには、近江晴子氏（祭礼遺産研究プロジェクト研究員・大阪天満宮文化研究所研究員）が、助松屋文書を研究していたことを振り返りながら、武家と異なり、大阪の商家では長子相続ではなく、才覚あるものを養子に迎えて跡継ぎとすることなど、大阪の商家の伝統がどのようなものであったかが自らの体験をもとに語られ、参加者の興味を引いた。

（生活文化遺産研究プロジェクト R.A. 宮元 正博）

第一回「豊臣期大坂図屏風」研究会

2007年7月18日(水)

会場：関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

報告者：藪田 貫(なにわ・大阪文化遺産学研究センター総括リーダー)

高橋隆博(なにわ・大阪文化遺産学研究センター長)

2007年7月18日、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターで、エッゲンベルク城博物館(オーストリア・グラーツ市)が所蔵する「大坂図屏風」の研究会がおこなわれた。この屏風は、エッゲンベルク城博物館「インドの間」に飾られていたもので、ドイツ・ケルン大学のフランチスカ・エームケ氏(東洋学部日本学教授)によって日本に紹介された。大阪城天守閣研究副主幹・北川央氏(当センター研究員)らの鑑定の結果、日本でも数少ない、豊臣時代の大坂を描いた作品であることが確認され、昨年10月、朝日新聞第1面に報道された。本屏風に関して当センターは、2007年6月にはオーストリア・州立博物館ヨアネウムと、7月には大阪城天守閣との間で研究協定を締結している。

研究会では、6月にオーストリアを訪問した高橋隆博センター長と藪田貫総括プロジェクトリーダーが、視察報告と、本屏風についての知見を発表した。

藪田総括プロジェクトリーダーからは、本屏風がエッゲンベルク城に所蔵されるにいたった経緯と背景につい

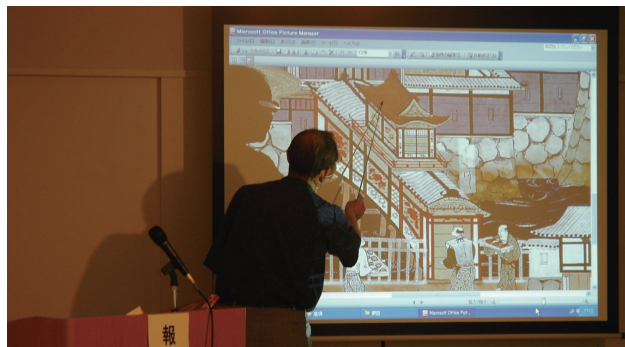


屏風の来歴等について報告する藪田総括プロジェクトリーダー

での報告がなされた。エッゲンベルク城は、地方の郷土から出てハプスブルク家の貴族になった初代エッゲンベルク侯ハンス・ウルリッヒ(1568～1634)によって築城された。エッゲンベルク侯3代目にあたるヨアン・ザイフリート(1644～1713)は、芸術に深い関心を持ち、1670～1700年代にオランダから多くの品を購入しているが、彼が没した際に作成された財産目録に「インドの屏風、25フロリアン」という一項があり、エッゲンベルク城博物館主任学芸員バーバラ・カイザー氏によれば、これが「大坂図屏風」であると推定されている。

本屏風は2000～2004年にかけて大規模な修復が施されたが、それに先立ち、1990年には現状調査がおこなわれている。その際、屏風に描かれる金雲に用いられた金箔が剥落しかけるほど損傷していたこと、4層に貼られた裏打ちの最奥分に書の練習をした紙が多数用いられていたことなどが明らかにされた。

高橋センター長からは、屏風に描かれる景観や描写手法についての報告がなされた。この「大坂図屏風」は、



屏風に描かれる景観を解説する高橋センター長

画面下部に大川が配され、北から俯瞰した構図をとる、8曲1隻の屏風である。高橋センター長は、これと対になるもう1隻の屏風が存在し、左右あわせて8曲1双の「京・大坂図屏風」だった可能性も捨て切れず、構図に関して問題が多分に残るとした。また、屏風に描かれる人物の描写や金雲の様式、使用されている顔料などから、この屏風の制作年代が、当初予想されていた江戸時代初期より下ることも想定されるとし、今後の研究における課題を提示した。報告の後、参加者の間で議論が交わされ、北川央氏によって、屏風に描かれた事物の特定や、金雲による情景の区切りについての指摘があった。



研究会参加者の間で議論が交わされる

本屏風に関する共同研究の一環として、2007年9月28日、29日には国際シンポジウムが開催された。また今後の展開として、本屏風をカラー図版で紹介する図録の作成や、公開展示の開催も検討中である。

(祭礼遺産研究プロジェクト R.A. 内田 吉哉)

招聘研究員室だより

当センターの4階に招聘研究員室がある。そこに7月30日～8月20日の間、ルーヴェン・カトリック大学（ベルギー）より交換研究員として、ディミトリ・ファノーヴェルベッケ氏が来られ、滞在された。受入担当者である藪田貫総括プロジェクトリーダーの斡旋で、同氏から「ベルギーにおける日本学の現状」について報告していただく機会を得た。

2007年8月8日（水）

Dimitri Vanoverbeke（ディミトリ・ファノーヴェルベッケ）氏
（ルーヴェン・カトリック大学芸術学部教授）



ルイス・フロイス（Luis Frois, 1532-1597）に始まるヨーロッパの日本学は“Japanology”もしくは“Japanese Studies”と呼ばれている。ファノーヴェルベッケ氏によると、このふたつの言葉には本来、方法論的な違いが含まれており、前者はヨーロッパという枠組みの中で日本を理解しようとするステレオタイプ的な方法で、後者は日本語を使ったり、一次史料を用いたりしながら、中立の立場で研究しようとする方法だという。つまり、前者が比較文化論的行なわれるのに対して、後者は日本における日本研究と同じような方法を取り入れて行なわれるということである。ただ、現在ではそれほど厳密に区別しているわけではないようで、事実ルーヴェン大学では“Japanology”が用いられつつも、方法論的には“Japanese Studies”に近い。

ルーヴェン大学の日本学科は1986年に中国学科から独立する形で設立された。学生数は当初、バブル経済を背景とした日本企業のヨーロッパ進出もあり、1年生が50人程度いたという。その後、日本は90年代の不景気に入り、それにともない日本学科の学生も減少したが、今年の1年生は80人程度と、かなり増加している。ただし、2年生になるころにはその数は半分から4割程

度にまで減っているだろうということである。ベルギーの大学には入学試験がない。そのかわり、授業について来られない学生はどんどん辞めていく。考え方の基礎として最初に哲学を学ばなくてはいけないが、それにについていけない学生が多いのだそうだ。

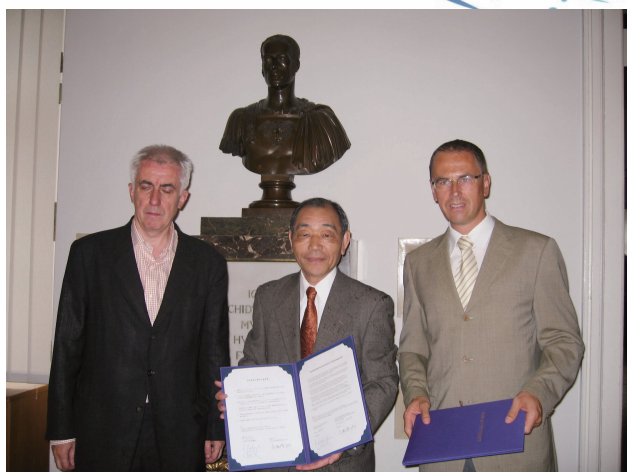
ヨーロッパでは2003年にボローニャ・プロセスと呼ばれる動きがあり、大学が大きく変わった。EU加盟国の文部大臣が集まって、大学改革と教育プロセスの統一を行い、国際的に通用する大学を作ろうと考えたのである。高等教育のグローバルスタンダード化とも呼ぶべきこの動きの結果、EU加盟国ではバチュラー（学部）課程が3年間と、マスター（修士）課程が1年間というプログラムが採択された。3年間で一通りのことを学んだ後、より専門的な知識を1年間学ぶという2段階学位取得式となったのである。2011年からはマスター課程が2年間になるので、そのうちの1年間を日本への留学期間としたいと、ファノーヴェルベッケ氏は計画しているようだ。

ルーヴェン大学の日本学科に在籍する学生たちの選ぶテーマは幅広く、今年は日本の年金制度や、有吉佐和子の小説2冊を題材に、戦前と戦後で民法における家族制度がどのように変化したかを考察する、といったものまであったという。学生は講義の際に聞いた話から興味を広げていくので、ファノーヴェルベッケ氏のカバーする学問領域から大きく逸脱することは少ないそうだが、もしそういうテーマを持った学生がいたとしても、新しいことを勉強するきっかけになるので、とても刺激になると氏は語った。

そんな状況の中、現在は日本のポップカルチャー（そこには、近年サブカルチャーと呼ばれる領域も含む）が人気を集めているという。EASJ（European Association for Japanese Studies）という、500人～1000人程度が集まる学会でも、「能」や「歌舞伎」といった、いわゆる“日本の伝統文化”をテーマとした報告にはあまり人が集まらず、「少女マンガ」や「チンドン屋」といったテーマの報告には人が集まるというのだから驚きである。この現象は日本で歴史に携わるものとして少々寂しいような気もする反面、現在の日本文化に対する生の評価として非常に興味深い。

（生活文化遺産研究プロジェクト R.A. 宮元 正博）

共同研究の協定を結ぶ



協定を結ぶ高橋センター長

オーストリア・グラーツのエッゲンベルク城所蔵「大坂図屏風」について、当センターは、2007年6月5日に州立博物館ヨアネウムと、共同研究に関する協定を結んだ。協定書は6カ条からなり、日本語とドイツ語で作成され、それぞれが保管することとなった。共同研究は、2007年から09年の3カ年、研究調査、シンポジウムの開催、資料の相互利用、研究成果の交換などを行なうことが取り決められた。

また、7月2日には、大阪城天守閣とも協定を結び、同じく共同研究を進めることになった。

センターでは、9月の国際シンポジウム後も継続して「大坂図屏風」の研究を行っていく予定である。



大阪城天守閣

インターンシップ実習生の受け入れ

2007年度も長期インターンシップ実習生として2名の学生を受け入れている。

2007年度インターンシップ実習生

岩下夕岐子（関西大学工学部・化学工学科 4回生）

田中 美帆（関西大学総合情報学部・総合情報学科 3回生）

6月から週一回程度、センターの調査・研究活動を実習している。今年度は、主に地域連携企画第三弾「もめん博物館 in 平野」について、センター研究員とともに担当した。

今後の予定

2007年11月24日（土）第4回文化遺産学フォーラム
「なにわ・大阪の文化力—大阪文化遺産学の系譜と源流を辿る—」

会場：関西大学千里山キャンパス

新関西大学会館北棟ホール（正門横）

第1部 能勢人形浄瑠璃 ろっかくざ 鹿角座公演

第2部 シンポジウム

基調講演：中野三敏氏（九州大学名誉教授）

パネリスト：井上 宏氏（樹生活文化研究所・「上方研究の会」代表）

近江晴子氏（大阪天満宮文化研究所研究員）

酒井 一氏（大塩事件研究会会長）

水田紀久氏（木村兼葭堂顕彰会代表）

高橋隆博（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター長）

コーディネーター 藪田 貫（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター総括プロジェクトリーダー）

※関連展示として、企画展「なにわ・大阪の文化力—大阪文化遺産学の系譜と源流を辿る—」を、11月24日（土）から12月1日（土）まで、関西大学博物館において開催いたします。

編集後記

『難波湯』No.7をお届けいたします。今年も早いものであと2ヶ月になりました。今年度上半期、センターでは、国際シンポジウム、NOCHSレクチャーシリーズ、ワークショップ、研究例会、大坂図屏風研究会と、短い期間に立て続けに研究行事を行いました。そのため本号はいつもより4頁多い12頁となっております。どうぞご味読ください。

また9月28・29日には、「豊臣期大坂図屏風」の国際シンポジウムを開催いたしました。内容は次号のニューズレターに掲載する予定です。

（R.A. 松永友和）

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業
オープン・リサーチ・センター整備事業（平成17年度～21年度）
なにわ・大阪文化遺産の総合人文学的研究

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

News Letter 「なにわがた 難波湯No.7」

発行日 2007年11月11日

発行所 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

発行者 高橋隆博

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

TEL 06(6368)0095 Fax 06(6368)0092

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/home.htm>

E-mail naniwa@jm.kansai-u.ac.jp

印刷所・編集協力（株）廣済堂